

梁啓超の書（杉村楚人冠記念館蔵）と康有為の汗漫舫

——詩境からたぐる変法への情——

吉田 薫

はじめに

一 書の出典について

二 康有為と汗漫舫

三 梁啓超の書と「出都留別諸公」

四 都から故郷へ

五 梁啓超への提言と変法の始動

おわりに——康有為と詩をめぐって

はじめに

千葉県我孫子市にある杉村楚人冠記念館には、梁啓超の書が所蔵されている。筆者が杉村楚人冠記念館を訪ねた折に梁啓超の書の存在を知った。杉村楚人冠記念館に拠ると、その書は杉村楚人冠関係資料として所

蔵されているものの、梁啓超の書と杉村楚人冠との関わりについてまではわからないとのことであった。その後、筆者も記念館所蔵の資料を調べたが、この他に梁啓超関係の資料は見あたらなかった。したがって、本稿では、主に梁啓超の書とそれに関わる康有為の詩について整理と考察を行い、今後の調査と研究につなげていきたい。

一 書の出典について

杉村楚人冠記念館に所蔵されている表装された梁啓超の書の内容は次の通りである。ここでは便宜上、詩句は区切って記した。

眼中戦国成争鹿 海内人材孰臥龍
倚劍長号帰去也 千山雲雨嘯青鋒

南海先生詩 光緒己亥 梁啓超

この四句からなる書は、梁啓超が編纂した『南海先生詩集』（一九一一年刊）の第二巻『汗漫舫詩集』に収められている詩の一部であり、「出都留別諸公」と題する、全五首からなる七言律詩の二首目の後半部分である。梁啓超は康有為の詩を整理すべく、書き写して四巻本の詩集を編纂した。それが『南海先生詩集』である（本稿では梁本と記す¹⁾）。さらに崔哲が手抄した『康南海先生詩集』十五巻本があり（本稿では崔本と記す）、これは一九三七年に商務印書館で影印本として刊行され、後に、蔣貴麟編『康南海先生遺著彙刊』（宏業書局、一九七六年）に収められた。『康有為全集』（中国人民出版社、二〇〇七年）所収の『康南海先生詩集』は、さらに上海博物館所蔵の康有為の手稿もあわせて対校を行った上で収録したものである。本稿では基本的に『康有為全集』に拠って康有為の詩を検討し、必要に応じて梁本と崔本を参照する。

梁啓超が戊戌政変後、一八九八年十月に來日し、翌年に書写した杉村楚人冠記念館に所蔵されている書の詩句が、康有為の詩集『汗漫舫詩集』に収められていることが確認できたため、次に『汗漫舫詩集』について見ていきたい。

二 康有為と汗漫舫

康有為の詩集『汗漫舫詩集』の序には、次のように綴られている。

吾五遊京邑、七次上書、皆旅於宣武門外米市胡同南海會館。館別院回廊、有老樹巨石、小室如舟、吾名之為汗漫舫。愛其幽勝、与野人之質為宜、頽歲居之、読碑洗石、著『広芸舟双楫』在此。簿録京

師旧作、皆壯歲七八年中者、都之為『汗漫舫集』。其出入京師、便道所遊作者亦附焉。上書發憤、放浪銷憂、以記進退無常、或躍在淵之時焉。歲久每佚、今緝得如千首³⁾。

まずこの詩集の名につかわれている「汗漫舫」というのは、康有為が北京で居住していた南海會館の一室の名に由来する。ここに挙げた『汗漫舫詩集』の序に拠って康有為と汗漫舫の因縁を簡潔にまとめると、康有為は都北京には五度訪れ、七回上書を行った。その時の滞在先は、すべて宣武門外米市胡同にある南海會館であった。この南海會館の構造は、會館の主たる庭の他に、別に回廊のある一角があつて、庭には老木と巨石があり、康有為が居住していた小さな一室もあつた。康有為はその一室を大海原に浮かぶ一艘の船に見立てて「汗漫舫」と名付けた。康有為は汗漫舫のひっそりとした佇まいを好み、「野人」である自分の性質と実に合うと言っている。ここにしばしば逗留しては硯を洗い、康有為の代表的な書論『広芸舟双楫』を完成させた。

『汗漫舫詩集』収録の詩に関しては、康有為の言に拠ると、北京に滞在していた頃の、年三十を過ぎて七・八年の間に著述した作のほか、北京と故郷を行き来している時に、その途上で上海や他の地でしたためたものも収めたという。康有為曰く、この詩集に収めてある詩は、上書で発憤した時や、各地を巡って鬱屈した気持ちを紛らわしていた時に作ったものであつた。進退が定まらず、天まで飛翔したかと思えば深い淵の中に沈んでゆくといったその時々自身の状態と心持を綴ったものであつた。その後長い時を経て、詩はほぼ散逸してしまつたが、今ここに千首余り集めたものがこの『汗漫舫詩集』であつた⁴⁾。

康有為は居を汗漫舫に移し、次のような詩を詠んでいる。

移居汗漫舫

数月京華臥、幽棲似故山。鳥声常在樹、石勢独当関。
洗竹為奴課、看花帶客還。日斜烹苦薺、天許幾時閑。

（数ヵ月北京に身を潜めて、この汗漫舫で静かに暮らすのは故郷の山の中にいるようであった。木々には常に鳥がさえずり、庭の石が入り口をふさいでいるようになっていいる。自分は筆を洗って僮僕の日々の学習に備え、客人をとまなびて花を鑑賞する。日暮れには番茶を淹れて、天から与えられた幾何かの安閑としたひと時を過ごすのであった）

この他に、汗漫舫の様子を描いた詩に、「苦蚊行」と題した作がある。この詩では、汗漫舫は木が多く、自然に恵まれた快適な住処であるのだが、蚊が多いため、蚊の駆除に乗り出すことが述べられている。庭には桐の木があるのだが、そこに留まることを許されているのは白い鳳凰だけだ。この人品の高潔さも備えたようなものだけが留まってよいのであって、蚊のようなものは退治するに限るということを綴る。⁶ 一見汗漫舫の日常を描きながらも、朝廷内部も含め害悪となるようなものへの嫌悪と拒否をも表しているのではなからうか。

『汗漫舫詩集』の序といい、「移居汗漫舫」といい、康有為の詩の中では汗漫舫は、何とも幽玄な趣きを備えた場所として描かれているが、康有為が変法の大事を担うべく、一八八八年「清朝開闢以来の上書」に失敗して、康と近しい官僚の沈士培と黄仲弢から「国事を語るなかれ」と

忠告され、静かに金石文字に没頭したのもまた汗漫舫であった。

上書驚闕下、閉戸隱城南。洗石為僮課、攤碑与客譚。
著書銷日月、憂国自江潭。日歩回廊曲、応従面壁参。⁸

康有為は言う。上書は朝廷を驚愕させたが、今はひっそりと汗漫舫で暮らしている。硯を洗っては僮僕に教えたり、客人と碑を語り合ったりしている。

そして『広芸舟双楫』も完成させる。文章を綴って月日を費やしていたわけであったが、康有為は自身の憂国を「自江潭」と任じていた。わが身は一介の書生で、江湖から、社会の底辺から国を憂いているのである。日々汗漫舫の回廊を歩き、自らを省みながら悟ることも必要だと思われるのであった。

三 書の詩と「出都留別諸公」

さて、ここで杉村楚人冠記念館に所蔵されている書に綴られた詩の全容を見ていきたい。梁啓超は康有為の『汗漫舫詩集』に収録されている律詩、「出都留別諸公」から一部を書写した。

出都留別諸公

吾以諸生上書請變法、開国未有、群疑交集、乃行。

滄海驚波百怪横、唐衢痛哭万人驚。
高峰突出諸山妬、上帝無言百鬼瘳。

豈有漢廷思賈誼、拼教江夏殺禰衡。
陸沈預為中原嘆、他日応思魯二生。

天龍作騎万靈従、独立飛來縹緲峰。
懷抱芳馨蘭一握、縦横宙合霧千重。
眼中戦国成争鹿、海内人材孰臥龍。
撫劍長号帰去也、千山風雨嘯青鋒。

表海神旗啓大都、西山王氣未榛蕪。
百年感愴伊川発、万里蒼茫属国囹。
原廟幽靈呵彷彿、釣天広楽聴模糊。
無端又作觚稜夢、醒視扁舟落五湖。

両載京華久滯留、無終從此老田疇。
安排行集成千卷、料理芒鞋出九州。
天下英雄輪問舍、地中山海遍登樓。
只愁莽莽乾坤大、無処滄浪着釣舟。

一曲蒼茫奏水仙、靈飛鬼嘯一千年。
木公虛擁扶桑日、金母高居紫焰天。
雲雨不興龍似睡、波濤暗涌鰐流涎。
只今東海靈鼃吼、哀怨如聞廿五弦。⁽⁹⁾

「出都留別諸公」は一八八八年、康有為が上書を試みるが失敗し、翌八九年に都北京を去る際に諸公との別れを詠んだ詩である。この詩の冒

頭に、北京を離れる理由として、自分は科挙の受験生たちと上書を行い変法を要求したこと、上書というのが清朝開闢以来の出来事であり、この行為が官人をはじめとする多くの人たちに受け入れられなかったがゆえにここを立ち去る、という説明が付されている。

この詩の主要を見ておくと、まずは自身が清廷から退けられた状況を述べる。天下が混乱するなか、志半ばに終わった唐衢⁽¹⁰⁾（康有為）の嘆きに人々が慄く。「高峰」（康有為）は突出した存在であるがために「諸山」（周囲の者たち）の嫉妬を招いた。皇帝は無言で、百鬼は険しい形相をしている。このように自らの置かれた状況を描いた上で、漢廷がなぜ買収を思うであろうか、漢の文帝は一度賈誼を呼び戻したけれど、自分は清朝から呼び戻されるといふことはあるまい。禰衡は江夏に送られ太守黄祖に殺された。わが身も同じような目に遭うだろうか。わたしはこのままでは国が亡ぶのではないかと予言し嘆くのだが、朝廷は亡国の時になって、魯の二人の学者を思い出すであろう。康有為はここで漢の叔孫通の招聘に応じなかった魯の二人の学者を自身になぞらえ、国が亡ぶ時になって人々はわが身を思い出すことであろうという⁽¹¹⁾。康有為は清朝に対峙した自身の価値を示す。

そこで康有為は天の龍にまたがり多くの者たちを従えて、独り立ち上がって闊歩するのであった。芳しい蘭を抱き、天下を自在に行き来する。康有為自身、自ら香り高く美しいもの、「芳馨蘭」を持つていることを強調する。今や戦国の世で列強による覇権争いが起こっている。国内の人材で誰が臥龍であろうか。ここでも臥龍（諸葛孔明）を自身になぞらえているのであろう。剣をとって高々と別れることをば響かせ、千山風雨のなか、この剣の音は響きわたる。

次に清朝の現状を振り返りつつ自らの心情を述べる。異民族が北京に

都を定めるが、西山（北京）の「王氣」はいまだ衰えていない。百年もたたないうちに夷狄の地になってしまふであろうという悲痛な思いは今のわたしにも強く共感を覚えさせるもののだが、この広々とした大地は我が国土に属しているのである。康有為はこのように述べて、清朝が全土を統一していることを表現する。そして廟の中にいる霊たちも何か騒いでいるが朦朧としていて、天まで届く音楽もはっきりと聴きとることができない。国の状況が不穏であることを言う。そこで船が五湖を流浪しているのを夢見、隠士になる気持ちも去来するのであった。

北京には二年滞在し、これから田舎で一生を終える。千巻余りある書籍を整理し、取るものもとらず身支度をして「九州」へと旅立つ。天下の英雄たちがわたしにどこに住んでいるのか尋ねてきたら、わたしは天地山海をめぐって楼に登っていると答えよう。「登楼」、つまり自分の抱負や思いのたけを表明するのであった。ただ憂うるのは、天下はあまりにも広く、釣り糸を垂れる場がない、隠遁の場がないことであると、隠士という存在も念頭にあることがこでも示される。

康有為がこの世のありようを見るに、水仙の調べがあたり一面に広がり、それは一千年もの間、霊が飛び交い鬼が鳴いているようであった。

また、木公（東王父）は扶桑の太陽を擁しているがそれはかりそめであり（実質的な権力は持っていない）、金母（西王母）は紫焰たなびく高い天に居る。これは光緒帝と西太后を指す⁽¹³⁾。

そして最後は次のように締めくくる。龍とともにいる雲と雨は今や動きを見せず、龍は眠りの中にいるようである。波濤が荒れる中サメが跋扈し始めている。また東海にいる聖なる亀が吼え声をあげる。その声は悲しみと怨みを帯び、琴の音のようであったと。

龍は中国を指す。清朝の朝廷内で改革を遮る、好ましからぬ輩が蠢い

ている。そして当時の状況を見るに、「東海」での聖なる亀の叫びは、清仏戦争で犠牲になった兵士たちの魂の声であろう⁽¹⁴⁾。

詩では清朝中国のなかにわずかながらに残存する中華の伝統を手繰り寄せつつ、また立ち去る身には隠逸の世界も去来しつつ、あくまで現世における自己を力強く昇華させる。内憂外患のさなか、北京と諸公に別れを告げたのであるが、それは次なる行動へと続く起点であると、己の存在価値を全面的に描いて見せた。

さて、ここまでは梁啓超が整理した詩集『南海先生詩集』（一九一一年刊）と各版本の対校を経て整理された『康有為全集』所収の版本に拠って詩の全容を見てきた。ここで改めて、杉村楚人冠記念館蔵の梁啓超の書の詩句「眼中戦国成争鹿 海内人材孰臥龍 倚劍長号歸去也 千山雲雨嘯青鋒」（傍線は筆者）をそれら版本と照合してみると、一八九九年に梁啓超が書写した文句では、「撫」が「倚」、「風」が「雲」と表記されている。わずかながらに文字の異同があるが、梁啓超の解釈に則った詩句として読んでみても、意味としては康有為の言わんとすることと大差ない。戊戌政変後まもない時期に、梁啓超があえてこの四句の文言を選んだのは、変法が失敗した当時の状況も含め清朝は戦国の世の如く、様々な勢力が主権を争っており、そのような中国に諸葛孔明ほどの人材は、康有為を差し置いて誰がいるのか、ということを伝えたかったのであろう。康有為、梁啓超は杉村楚人冠記念館所蔵の書にて彼らのメッセージが強く出ている文句を綴ったと言えよう。

四 都から故郷へ

『汗漫舫詩集』には、康有為が都を離れる際に読んだ詩として、先にあげた「出都留別諸公」に続きさらに二首ほど収録されている。「出都留別諸公」を詠んだ時の康有為の状況について他の詩からも検討してみたい。

去国吟

平生浪有回天志、今日真成去国吟。
回首五雲宮闕迴、柴車惻惻愴余心。
此去東山与西山、白石齒齒松栢頑。
或勸蹈海未忍去、且歌惜誓留人間。
東山白雲日夜飛、西樵山下栢桑肥。
百畝耕花花隸宅、先生歸去未應非。
古今碑刻三千紙、行裝網大如牛腰。
澹如樓中七松下、攤碑淪茗且聽潮。⁽¹⁵⁾

この詩では郷里の光景を思い浮かべながらも都を立ち去る心情を詠んでいる。天下を救うという自身の志に対して康有為は「無力回天」（無力）ではなく、「浪」、つまり無駄になってしまったという思いが強い。振り返れば、北京の宮殿は遠ざかってゆく。痛恨の思いで簡便な身なりで旅立つ。その時の康有為の心は故郷の名山・東山（羅浮山）と西山（西樵山）へ向かう。隠逸の場としての思いもあるのだろう。その山には白

石がむき出しになっている所に松と栢の木が生えているという。岩山のような場所にも松と栢がたくましく生息している強韌さを、自らの強い意志と重ねている。なぜなら康有為はここで世を捨てる考えはなかったのである。「蹈海」、隠士になるつもりはなく、この人間界にまだ身をおく気持ちに揺らぎはない。故郷の山々は、東山は一日中白雲が飛び交い、西樵山の麓は栢と桑が生い茂っている。康有為はかつて西樵山近くに礼山草堂を構える儒学者朱九江に師事した。師のもとを去ってからは西樵山の白雲洞に籠って思索を深める。「大同」思想をはじめ、康有為の人生を支えてゆく学問と思想が育まれてた場所である。広々とした花畑もある。そのような地にある家に帰ることは、何ら間違っていないと自分で言い聞かせるのであった。汗漫舫で集めた碑刻は三千紙となり、それを梱包したら牛の腰ほどのボリュームである。故郷には康一族の康国器が築いた園林（七松園）や多くの書を蔵していた澹如楼と二万巻書楼があつた。⁽¹⁶⁾ 康有為は一族が築き上げてきた自然と文化ともに豊かな土地に戻り、家で碑を並べお茶を喫しつつ潮騒を聴くのだと、故郷での自分のすがたを描いて見せた。

かたや康有為が相対した清朝の北京城は、猙獰な官僚が城門を守り、宮廷の門はいくら叫んだところで開けさせることもできない。

己丑上書不達、出都

落魄空為梁父吟、英雄窮暮感黃金。
長安乞食誰人識、只許朱公知季心。
海水夜嘯黑風狩、杜鵑啼血秋山裂。
虎豹猙獰守九閤、帝閭沈沈叫不得。⁽¹⁷⁾

この詩は、梁本の『汗漫舫詩集』は未収で、崔本により『新民叢報』所載の詩に拠って補われ収録された⁽¹⁸⁾。同じく康有為が都を離れる時に詠んだ詩である。落魄の身となり『梁父吟』もむなしく落ちつづけてしまった。北京では今や誰もわが身を相手にしないが、季布の才を見抜いて取り立てた朱公の故事が思い出される⁽¹⁹⁾。康有為の悲痛な叫びは山も裂けるほどのものであった。

翠朝の出立をひかえ、康有為は琵琶の音に哀調を覚え、青衣をまとった白居易の感慨に重ねて詠む。

出都夜饑、有二伶撥琵琶、促柱哀音、遂有白傳青襟之感。明朝行

銀燭傲傲夜五更、鳳城秋夢未分明。

不堪酒渴微雲後、一曲琵琶帶別聲。⁽²⁰⁾

灯火がゆらめき夜も深まる中、北京はまだ秋夢のなかにいるようである。心情あまりにもつらく酒を少し口にしたところで酔いが回ってしまふ。琵琶の音は離別の調を帯びていた。

こうして汗漫舫での日々を共にした大量の碑刻とともに故郷へ向かう。その途上で病んでいる身体を押して上海の徐園に立ち寄る。

上海徐園留題

蕭風撼雨墨模糊、強病重遊秋氣蘇。

去国情懷存宝剑、尋花心事落当壚。

過橋鵝鴨頻相惱、登閣棠梨暫借扶。
碧海涓涓通是處、墜紅消息豈真無。⁽²¹⁾

寂しげな風が吹き陰鬱とした空模様の中、無理を強いて遊覧に赴くと秋の気配も息を吹き返してきたように感じる。都を去っても胸には宝剑を抱き、鬱屈した気持ちを酒でまぎらわしたくなる。橋を渡るとガチョウと鴨の騒がしさがうつつとうしく、棠梨の木を支えにして楼に登る。大海原の碧い海がここまで流れてきていた。

ここで康有為は徐園の池の水と大海原が繋がっていることを言っているのであるが、最後に「墜紅消息豈真無。」の一句で締めくくる。この句は、散った花びらが海に落ちたという便りを何故わたしが知る由もないと言えようか、というのである。なぜなら、目の前にある池と海はつながっていて、海原に散った花はここまでも流れてくるのだから、わたしも知ることができるのだと。わたしはどんな辺鄙な場所においても、朝廷のことを知り得るのである、という事を言外に込めているように思われる。

五 梁啓超への提言と変法への始動

一八九九年に梁啓超は「出都留別諸公」の一部を綴り、それが杉村楚人冠記念館に所蔵されているが、その書をしたためた同年に、東京で開催された哲学会の会合にて梁啓超は師康有為の思想について講演しており⁽²²⁾、日本で康有為の紹介にも努めていた。康有為の『汗漫舫詩集』には、数は多くないが彼が若き門下生梁啓超らに詠んだ詩も収録されている。ここでは『汗漫舫詩集』の詩から康有為と梁啓超の関わりと、変法への

歩みを見たい。

示任甫

神鬼天龍日夜圍、時時說法万花飛。
金輪千轉相不動、紫府灯光宝焰微。
華嚴国土時時見、大地光明無語言。
只是衆生同一氣、要將悲憫塞乾坤。⁽²³⁾

示任父、孺博及曾重伯翰林

三千劫里橫金翅、二六時中看白牛。
終日散花忘結習、諸天聞樂少淹留。
脫將纓絡親貧子、故入泥犁救重囚。
丈室百千獅子座、金身偶現不須収。⁽²⁴⁾

一首目は康有為が梁啓超に向けて詠んだ詩で、二首目は梁啓超、麦孟華、翰林院の曾広鈞に詠んだ詩である。一首目では仏教の世界を描くなかで、一筋の光明、それは衆生みな同じくする心、あまねく人々への慈悲、仁の心を天下に満たすべきであることを説く。二首目も朝から晩まで經典を念じ、仏教の教えを讃えつつ、自ら纓絡を脱いで人界に降り、苦しんでいる人々に寄り添うべく、地獄へ行き罪を着せられた人たちを救うという。人々を救済した後はまだ戻って仏法を説くので獅子の座位は片づける必要はない。引き続き物事の道理の追究に努めてゆく、とい

うのが康の教えでもあらう。

梁啓超が北京の会試にのぞむ際には、康有為は次のような詩を詠む。

送門人梁啓超任甫入京（『万木草堂詩集』所収）

道入天人際、江門風月存。小心結豪俊、内熱救黎元。
憂国吾其已、乘雲世易尊。賈生正年少、跌蕩上天門。

登台惟見日、握発似非人。高立金輪頂、飛行銀漢滨。
午時伏龍虎、永夜視星辰。碧海如聞淺、乘槎欲問津。

悲憫心難已、蒼生疾苦多。天人忘上策、却曲怕聞歌。
水雪胎終古、雲雷起大河。系辭終未済、吾道竟如何。⁽²⁵⁾

三首の律詩のうち、最初の一首はこれから会試にのぞむ梁啓超への期待を詠む。天道と人道の間において、梁啓超が高尚な人徳を備え、かつ梁の故郷江門の良き伝統を受け継いでいることを賞賛し、⁽²⁶⁾ 都では優れた人物たちと交わって人々の苦難の救済に努めることを期待する。康有為は自分は上書に失敗したが、梁啓超が朝廷に入ることができれば、世の中に重んじられるであろうと、年若き梁啓超を賈誼になぞらえ、梁啓超が科挙に合格して、変法を実現させることを願う。後半は康有為の変法運動への決意表明になっている。前途に不安を感じつつも、変法運動を実現させていく意思を示しているのである。⁽²⁷⁾

さらに『汗漫舫詩集』を読み進めると、この詩集の後半には日清戦争の講和交渉をめぐる、康有為らが具体的に行動を起こした時の詩が収

録されている。一八九四年に日清戦争が起こり、一八九五年に下関条約が締結される。清朝では主戦派と主和派が対立していた。主和派の軍機大臣孫毓汶は辞任に追い込まれる。康有為は梁啓超とともに会試にのぞむため上京していた。日本との講和を拒否すべく、多数の挙人連名で上書「公車上書」を行う。『汗漫舫詩集』でもその時に詠んだ詩は収められていて、康曰く、十八省の挙人三千名の連名で「公車上書記」と題して上書を行った。米国の駐清公使田貝（Charles Denby）がその原稿を写して天下にばらまいたので、みな争って抄写したと綴る⁽²⁸⁾。結局講和を覆すことはできなかったが、変法への活動を始める。それを詠んだのが次の詩である。

山河已割国搶攘、憂国諸公欲自強。

復社東林開大会、甘陵北部預飛章。

鴻飛冥冥天將黑、龍戰沈沈血又黃。

一典歎歎揮涕別、金牌召岳最堪傷。⁽²⁹⁾

国土は割讓され国は大いに乱れ、憂国の士はみな自強を求めている。

復社の東林党のような大会（強学会）を開くと、それに対して弾劾の動きがある。鴻⁽³⁰⁾（康有為）は飛翔するがあたりは暗雲たちこめ、康有為も北京を離れる。戦いに敗れた龍は落ちつづけて傷を負っている。国は列強の侵略に血を流しているのである。岳飛の劇的一幕を見て涙をぬぐって別れを告げる。皇帝が岳飛を呼び戻した場面が最も辛い、と締めくく⁽³¹⁾る。

この詩の背景の説明として、康は南へ戻り、北京での強学会に続いて上海で改めて強学会を立ち上げるが、これも弾劾され閉鎖に追い込まれ

たことが付記されている。

『汗漫舫詩集』は一八九五年、康有為、梁啓超らの強学会が閉鎖される頃までの詩が収録されている。その後、梁啓超は時務報館の創設に加わり『時務報』を発行して、変法思想を唱導していくのであった。

おわりに―康有為と詩をめぐって

『汗漫舫詩集』には、康有為が北京郊外や、さらに足を延ばして辺境に近い地域を訪ねて詠んだ詩が多く収められている。北京郊外にある名利潭柘寺まで来てみれば、都の人々が言うほどの美しさはなく、荒涼とした山寺であった。この有り様も康有為から見れば異民族の歴史と関係があるのであった。潭柘寺は金、元の時代の変遷を経てきた。寺の僧侶に勧められて休んでいると、康有為は夢の中で山の精霊と対話をする。

詩の後半は、康有為と山の精霊の対話が展開する。その山の精霊は康有為の潭柘寺の見方に対し異議を呈する。あれほど多くの人が美しいと讃えているのにと難じる。それに対して康有為は譲らない。ならばわたしがこの荒廃した山寺を自ら整えてきれいにしてみせるといふ。皇帝が愛でるほどの美景を作ってみせると。このくだりも、康有為が中国の現状を己が改変してみせるといふ意思を示しているのであらう。荒廃している、康の手にかければ生気がみなぎってくるのであって、最後は康有為の山の精霊への返答がそこかしこにこだまし山寺を震動させ、蕭条としていた竹林も清涼感を帯びるであった⁽³¹⁾。

続いて明陵で詠んだ詩でも、漢族がいかに異民族に苦しめられてきたかという歴史に思いを寄せているが、清朝は漢族と胡族をうまく統治しているというくだりになる⁽³²⁾。康有為が上書前に詠んだ詩には、清朝を讃

ええるものも少なからず見られる。明陵、昌平城を越えて要塞居庸関を望む。一晚中駱駝の鈴の音が響き渡り、はるかかなたの天にそびえる木の影が居庸関より東一帯に広がってゆく。今は戦乱もなく城壁も青草が茂っていて、康有為は戦死した英雄たち「鬼雄」に哀悼をささげる³³。そして居庸関から万里の長城に登り、異民族との攻防の歴史をしのびつつ長城に広がる光景に自らの意志を託す。

登万里長城

秦時塵堞漢家營、匹馬高秋撫旧城。
鞭石千峰上雲漠、連天万里庄幽並。
東窮碧海群山立、西帶黃河落日明。
且勿却胡論功績、英雄造事令人驚。
漢時関塞重盧龍、立馬長城第一峰。
日暮長河盤大漠、天晴外部數疆封。
清時堡堠伝烽靜、出塞山川作勢雄。
百萬控弦嗟往時、一鞭冷月踏居庸³⁴。

康有為が詠う長城は雄壮である。馬に乗り天高く秋晴れの中長城へ登る。楼は天まで伸びるほど高く、城壁は北方の地域に連綿と続いている。このような長城が異民族の防衛のために作られたという点にその功績を見るのではなく、これほど立派な事業が成し遂げられたこと自体に注目すべきだと強調する。そして漢代の光景を描く。盧龍は要塞として重要な地で、長城（八達嶺）が築かれた³⁵。黄昏れ時には大河が砂漠を蛇行しているさまが見渡せ、天氣がよければ境外の異民族を確認することもできた。清代は漢代と違って烽火があがることなくひっそりと静まっていた。

るのであるが、往時幾多の兵士が国土を守りぬいてきたことに感嘆しつつ、天空の月の様を描く。「一鞭冷月踏居庸」、戦火のない静寂の中での「冷月」。「一鞭」と形容されているので細長い月である。だけれども康有為はこのほっそりとした月を「一鞭」と形容することで、力強さを持たせる。この「一鞭冷月」、力強さを秘めている月は、長城の、これまで中国を守ってきた居庸関を踏みしめるのであった。

梁啓超は雑誌『清議報』と『新民叢報』のどちらにも、詩の欄を設けた。『清議報』では第一冊（一八九八年二月）より「詩文詞随録」という欄を設け、『新民叢報』では第四号（一九〇二年三月）より、「飲冰室詩話」という欄を設ける。『清議報』では詩のみの掲載で、康有為、譚嗣同ら、梁啓超の関係者の詩が多く掲載されている。続いて『新民叢報』の「飲冰室詩話」になると、梁啓超による詩の筆記のような体裁となる。梁啓超にとっては古代の詩人よりも、自分と近い関係の人たちの詩のほうが印象に残っていたし、彼らの詩をより多く記憶に留めていた。この詩話ではそれらを紹介しつつ自らの見解も綴る形をとっているため、梁啓超がそれぞれの詩人と作品をどのように見ていたかをも垣間見ることができ、ここで康有為の詩について、梁啓超がどのように捉えていたか見てみると、康有為の詩は、故郷の羅浮山を詠んだものが多くという。羅浮山とは、先にあげた康有為が都を離れる際に詠んだ詩「去国吟」に出てきた東山のことであろう。梁啓超は康有為が詠んだ羅浮山の詩として次の詩をあげる。「万峰走神僕、絶頂立飛仙。俯視但雲氣、山岳尽茫然。迷蒙難見日、呼吸欲通天。白帝如能問、蓬萊駕紫烟。」³⁶「万紫千紅總是春、昇天入地不猶人。曲徑危橋都歷遍、出来依旧一吟身。」³⁷梁啓超はこれら詩には、康有為の人格がとてよく表れていると評す

る。⁽³⁶⁾

この詩を見るに、康有為は、息を吸えば天にも通じようだといひ、山にいる自分は昇ったり降りたりとまるで人とは思えないようであつて、山中の曲がりくねった道や危うい橋もすべて歩きつくしたのだが、山から出るとやはりいつものわが身であると描いてみせる。この山の氣象と康自身の氣性が実によく合つていて、このような詩の特質は、先ほどあげた康有為の北京の郊外で詠んだ詩にもみられるし、『汗漫舫詩集』全体に行き渡っているように思える。康有為の詩は康自身の心氣とともに常に氣宇壮大な展開になる。そして時に仏教的な境地を描きつつも、「出世」にはならない。隱士に対して、知識人としての敬慕を抱きはするが（例えば「買山未成隱、悵望倚郊扉」⁽³⁷⁾）、自らは隱遁者にはならないのである。この点も詩で明確に示している。ここが、梁啓超が康有為はとりわけ杜甫を好んだという所以でもあろう。梁がいうには、康有為は意識的に杜甫を学んで自身の詩に取り込むようなことはしていないが、康の詩を見ると、杜甫の詩集に紛れ込んだもどれが康の詩か判別し難いほど、杜甫の詩風に近いものがあつた。⁽³⁸⁾

梁啓超は康有為の詩を百首余り讀んじていた。そのなかで、とりわけ好んでいるのが、本稿の冒頭であげた、杉村楚人冠記念館所蔵の書の詩の出典である、康有為が都を離れる際に詠んだ「出都留別諸公」全五首の一首と、「去国吟」の一部の句であつた。それを『康有為全集』所収の文言に拠つて記せば、「出都留別諸公」では一首目の律詩、「滄海驚波百怪横、唐衢痛哭万人驚。高峰突出諸山妬、上帝無言百鬼獐。豈有漢廷思賈誼、拼教江夏殺禰衡。陸沈預為中原嘆、他日思魯二生」。「去国吟」は二首目の絶句「此去東山与西山、白石齒齒松柏頑。或勸蹈海未忍去、且歌惜誓留人間。」と三首目の絶句「東山白雲日夜飛、西樵山下柘桑肥。

百畝耕花花埭宅、先生歸去未應非。」となる。⁽³⁹⁾ 梁啓超が康有為の詩のなかで最も好んだのがこれらの詩句であつた。

これらの康有為の詩については第四章で見えてきたが、「出都留別諸公」の詩に関しては、「飲冰室詩話」より前に、『清議報』の「詩文詞文録」でも既に一部取り上げられており、タイトルは「飲冰室詩話」と同様、簡潔に「己丑出都」と題されている。⁽⁴⁰⁾ 『清議報』、「飲冰室詩話」（『新民叢報』所載）ともに同じ原稿を使つたように見受けられる。梁啓超は先にあげた康有為の詩を、「飲冰室詩話」では「滄海飛波百怪横、唐衢痛哭万人驚。高峰突出諸山妬、上帝無言百鬼獐。漫有漢廷追賈誼、豈教江夏貶禰衡。陸沈忽望中原嘆、他日思魯二生」⁽⁴¹⁾と記しており、文字の異同がかなりある（傍線箇所）。梁啓超の記憶のなかでは、康有為がいわんとする大意は大きくは変わらないものの文字のもつニュアンスが弱まつてしまつた感がある。ともあれ、「出都留別諸公」の全五首からなる詩が、杉村楚人冠記念館所蔵の書、そして『清議報』、『新民叢報』といった、梁啓超が日本で活動していた時期の康有為・梁啓超らの主たる媒体でそれぞれ取り上げられており、梁啓超にとって康有為の「出都留別諸公」は康有為の詩を代表するものであつた。康有為がはじめての上書を試みたが果たせず都を去る時に詠んだ詩が、梁啓超に鮮明な記憶を留め、自らの主張をも伝えるものであつた。

「去国吟」の絶句の文言については、二首目の冒頭で、康有為はこれから「東山」と「西山」に向かうといっているのであるが、「飲冰室詩話」の梁の筆では康有為の向かう先が「南山」と「北山」になっている。⁽⁴²⁾ 続いて「南山之下豆苗肥、北山之上猿鶴飛。百畝耕桑五畝宅、先生歸去未應非。」となり、先にあげた全集所収の詩句の文言との隔たりが甚だしい（傍線箇所）。康有為の故郷の東山と西山が南山と北山になっており、

白石と松柏がなく、猿と鶴が登場する。梁啓超の断片的な記憶のなかでは、康有為が描いてみせた故郷の山容もただの隠逸の形象となり、古典の素材を援用して処理しているのである。「南山」で「豆苗」を持ってきて対処しているのは、陶淵明の「帰園田居」に拠って隠居の表現を作り出しているであろう。ここに康有為の故郷の光景はなく、康有為の詩境が失われてしまっていて実に惜しい改作になっている。梁啓超がいうには、康有為は詩で名をあげた人物ではないけれども、康の詩には通常の作家が成し得ないものを持っていた。なぜなら、康の詩は真の性情を発露させているので、詩自体に常に書き手の存在があった。つまり、梁啓超は康有為の詩はいつも康の存在そのものを感じさせる、というところに最大の価値を見ており、そこに「インスピレーション」も感じていたのであろう。『汗漫舫詩集』は、戊戌政変後も康有為、梁啓超の活動と思想の片鱗、および康の意思とを共に康有為特有の詩境の中で力強く伝える作品集であった。それを梁啓超は存分に活用し、日本でも自ら手で自身の意思を託し発信し続けたのであった。

【注】

- (1) 本稿では、康有為著、梁啓超手鈔『康南海先生詩集』（康同環（出版兼発行）、一九六六年）に拠る。
- (2) 以上、姜義華、張榮華編校『康有為全集』第二二卷（中国人民大学出版社、二〇〇七年）、「康有為先生詩集」の説明に拠る。
- (3) 『康有為全集』第二二卷、一五四頁。
- (4) 『康有為全集』の対校によると、上海博物館所蔵の原稿には百八首と記されていることが示されている。『康有為全集』第二二卷、一五四頁。
- (5) 『移居汗漫舫』『康有為全集』第二二卷、一六三頁。
- (6) 『吾生多園居、雅性愛水木。竭来居宜南、高齋饒槐竹。林薄既森翳、叢蔓並爭育。蚊虻洪輻湊、薨薨滿耳目。大者如蒼蠅、虎飛食人肉。嗟此翹

- 椅桐、台閣交蔭囑。只許白鳳凰、飛鳴拮其足。么麼爾何物、乃亦此巢宿。誓当聚火焚、掃除命僮僕。穢草皆捐滌、絶汝憑藉屬。大扇掃清風、臥簾書可讀。」『康有為全集』第二二卷、一六五頁。
- (7) 「出都留別諸公」『康有為全集』第二二卷、一六五頁。
- (8) 『康有為全集』第二二卷、一六四頁。
- (9) 『康有為全集』第二二卷、一六五—一六六頁。
- (10) 陳永正編注『康有為詩文選』（廣東人民出版社、一九八三年）八四—八五頁参照。
- (11) 同右。
- (12) 「伊川」の出典（『春秋左氏伝』）については、『康有為詩文選』八七頁に拠る。伊川は周代の地名。『春秋左氏伝』「僖公二十二年」に周の大夫が伊川を通りすぎる際に、被髪で野外で祭りをしている人を見て、ここもやがては夷狄の地なると嘆くくだりがある。楊伯峻編著『春秋左伝注修訂本』（中華書局、二〇〇九年版、三九三—三九四頁）、『春秋左氏伝（上）』（小倉芳彦訳、岩波書店、一九八八年、二四八頁）を参照。
- (13) 『康有為詩文選』八九頁。
- (14) 同右。
- (15) 『康有為全集』第二二卷、一六六頁。
- (16) 「我史」『康有為全集』第五卷、六〇頁。
- (17) 『康有為全集』第二二卷、一七四頁。
- (18) 『康有為全集』第二二卷、一七四頁、『康南海先生詩集（上）』（蔣貴麟編『康南海先生遺著彙刊』、宏業書局、一九七六年、九八頁に拠る。
- (19) 『康有為詩文選』、八三頁参照。
- (20) 『康有為全集』第二二卷、一六六頁。
- (21) 同右。
- (22) 丁文江、趙豐田編『梁啓超年譜長編』（上海人民出版社、一九八三年、一九四頁）、島田虔次編訳『梁啓超長編年譜』第一卷、岩波書店、二〇〇四年、四二五頁参照。
- (23) 『康有為全集』第二二卷、一七二頁。
- (24) 同右。
- (25) 『康有為全集』第二二卷、一七六頁。
- (26) 『康有為詩文選』、一〇八一—一一一頁参照。
- (27) 同右。

(28)

『康有為全集』第二卷、一七三頁。

(29)

『康有為全集』第二卷、一七四頁。

(30)

『康有為詩文選』、一四二—一四三頁参照。

(31)

『康有為全集』第二卷、一五六頁。

潭柘梵宮精麗、而山水平迤、無足觀者。賦此騰嘲

人言西山潭柘美、言遊潭柘當清商。棗林稀蕭初日黃、山石竦確曲徑長。

路傍柿熟葉帶霜、群峰攢天飛雲翔。萬松翠擁培塿岡、半紅微露琳宮牆。

石橋中引通長廊、毘盧樓閣妙嚴莊。殿前銀杏參天蒼、千載金元閱滄桑。

妙乘公主跌跡双、佞佛故事先椒房。括柏森繞少師室、病虎形容猶想望。

我遊名山經海外、岫壑環詭不可量。茲山澗洞皆平迤、石不峭秀泉不芳。

老栢美竹死削尽、惟有藍利爭輝煌。胡為都人交口譽、勞我車馬尋山荒。

寺僧延午憩、一夢清琅玕。山靈朱衣揖我言、君之持論未通方。

金門名士不識字、偷窺著述名譽光。草元子雲老寂寞、姓字闔吻不出鄉。

荒山雖無洞壑美、丹泉翠嶂煥奎章。延清有閣駐玉輦、至今常宿親藩王。

時恭邸頻月來遊。

貴人履齒踵趾接、從無詬謗只稱揚。惟君移文騰嘲笑、陳義雖高毋乃狂。

敷枉再拜謝山靈、豎儒愚固增恐皇。但欲手移窮荒好岩谷、鏹鑿雲根

來帝傍。

長嘯答靈震山寺、蕭蕭翠竹生清涼。

(32)

同右、一五七頁。

明陵哀

天寿百七里、峰障聳樓閣。豁房開堂戶、森聳出丘壑。

岡巒儼拜伏、信是帝王宅。英雄只眼巨、豈假王廖挾。

郁郁十三陵、神奧盤松柏。幽城何崔嵬、佳氣葱郁郁。

当其宮隧時、魚膏螢灯碧。玉棺藏九殿、南山為石椁。

宮監日進膳、翠輦來獻酌。荒哉政事失、興廢易三恪。

聖朝隆仁厚、禁樵飾丹雘。功德屹豐碑、亭亭侵寥廓。

寢殿儼天局、宮垣壯如昨。昔者宋諸陵、僧伽溺骨虐。

金魚喪玉匣、冬青淒霜薄。乃知今代仁、恩厚不能約。

我來覽天闕、華表双岳岳。翁仲陳夾道、列像如踴躍。

武將劍甲猛、文吏冠袍博。獅虎象馬羊、或伏或立搏。

巨大数丈余、皆用一石鑿。廿里道相望、大工何磊落。

万国陵墓壯、無如長陵卓。欧人多瞻望、我華色不削。

(33)

『康有為全集』第二卷、一五七—一五八頁。

過昌平城望居庸關

城堞逶迤万柳紅、西山岩巒霽明虹。雲垂大野鷹盤勢、地展平原駿走風。

永夜駝鈴伝塞上、極天樹影通關東。時平堡堠生青草、欲出軍都弔鬼雄。

(34)

『康有為全集』第二卷、一五八頁。

(35)

『康有為詩文選』、五八頁参照。

(36)

『飲冰室詩話』『新民叢報』第一四号、一九〇二年八月。

(37)

『靈光寺』『康有為全集』第二卷、一五九頁。

(38)

『飲冰室詩話』『新民叢報』第一四号、一九〇二年八月。

(39)

『康有為全集』第二卷、一六五頁、一六六頁。

(40)

更生『出都作』己丑『清議報』第一六冊、一八九九年五月。

(41)

『飲冰室詩話』『新民叢報』第一四号、一九〇二年八月。

(42)

同右。

(43)

同右。

(44)

同右。